

# 近代英語協会第 37 回大会

## ウェブ コンファレンス

— シンポジウム・研究発表 —

開催日：2020年8月24日(月)–9月2日(水)

会場：近代英語協会公式ホームページ内の特設サイト

[<http://www.modernenglish.jp/>]

近代英語協会事務局分室

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池 12

愛知学院大学文学部英語英米文化学科 前田満研究室内

電話：0561-73-1111 (代) FAX：0561-73-81790

会費振込口座 00810-9-5821

## ■ 研究発表 第一部

---

### 1. 「let go (of) NP における of の義務的出現について」

日本大学大学院生 村岡 宗一郎

現代英語の let は、let NP VP の構造が一般的であるが、語順が入れ替わった He *let go the ball*. も見られ、さらに of が付いた She *let go of him*. もまた散見される。この of の出現は、let go の後に代名詞が続く場合については義務的であるという。小野 (2015) によれば、go は対格を付与できないことから、虚辞の of が目的語の格付与のために義務的に出現すると述べている。しかし、この見解は、let go の後に普通名詞が続く He *let go the ball*. の構造が容認されることから説明的妥当性に欠ける。また Santorini and Heycock (1988) は句動詞との類似性から説明をしているが、なぜ of が出現するのかという点については明らかにしていない。本発表では、第一に、let go (of) NP が通時的にどの様な経緯を経て確立したのかを中英語から近代英語のコーパスである EEBO を用いて明らかにしていく。そして第二に let NP VP と let go NP に見られる意味・統語的差異から両構造は異なる統語構造を持ち、意味的曖昧性を解消するために of が義務的に出現すると提案する。

#### <参考文献>

小野隆啓. (2015) 『英語の素朴な疑問から本質へ—文法を作る文法』東京：開拓社.

Santorini, B. and Heycock, C. (1988) Remark on Causatives and Passive. Ms., University of Pennsylvania.

### 2. 「所有格主語動名詞の存続と混合動名詞の消失についての一考察」

名古屋大学大学院生 平田 拓也

本発表では、their reading the book のような所有格主語動名詞と the reading the book のような混合動名詞の歴史的発達について考察する。これらの動名詞は所有格または定冠詞と共に起するという点では名詞的な特性を示すが、前置詞を介さず目的語を取るという動詞的な特性も示す。Visser (1963-73) によれば、両者は後期近代英語までは共存していたが、現代英語において所有格主語動名詞は文法的であるのに対して、混合動名詞は非文法的であるとされている (Chomsky (1970), Miller (2002))。これらの事実を考慮すると、前者は現代英語まで存続しているが、後者は現代英語までに消失したということになる。

本発表では、*The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Modern British English, The Penn-Helsinki Parsed*

*Corpus of Early Modern English* などの史的コーパスを用いて、所有格主語動名詞と混合動名詞の近代英語以降の歴史的発達を明らかにするとともに、なぜ前者が存続したのに対し、後者が消失したのかを、生成文法理論の枠組みにおいて説明することを目的とする。

<参考文献>

Chomsky, Noam (1970) "Remarks on Nominalization," *Readings in English Transformational Grammar*, ed. by Roderick Jacobs and Peter Rosenbaum, 184-221, Ginn and Company, Waltham, MA.

Miller, Gary (2002) *Nonfinite Structures in Theory and Change*, Oxford University Press, Oxford.

Visser, Fredericus, Theodorus (1963-73) *An Historical Syntax of the English Language*, 4 Vols., E.J. Brill, Leiden.

### 3. 「Get 受動文における by 句について」

名古屋大学大学院生 森 敏郎

中部大学助教 田中祐太

現代英語における be 受動文および get 受動文は、by 句のステータスに関していくつかの点で互いに異なる性質を持つ。例えば、Collins (1996) や影山 (2007) などの先行研究では、get 受動文に by 句が現れる割合は be 受動文よりも低いことが指摘されている。本発表では、史的電子コーパスである *Corpus of Historical American English* および *The Penn Parsed Corpus of Modern British English*, 2nd edition から得られたデータに基づき、get 受動文に生起する by 句の分布の英語史における全体像を明らかにする。具体的には、get 受動文に by 句が出現した時期は 19 世紀であり、get 受動文それ自体の出現時期である 18 世紀 (Honda (2012)) よりも遅いことを示す。そして、get 受動文に by 句が現れるようになった原因は、同時期に起こった get 受動文の構造変化であると提案する。さらに、この提案に基づき、by 句のステータスに関する be 受動文と get 受動文の間の違いが正しく説明されることを示す。

<参考文献>

Collins, Peter (1996) "Get-Passives in English," *World Englishes* 15, 43-56.

Honda, Shoko (2012) "On the Origin and Development of the *Get*-Passive: with Special Reference to Grammaticalization," *English Linguistics* 29, 69-87.

影山太郎 (2007) 「get 受身文の統語構造と概念構造について」『英米文学』51, 63-82.

## ■ 研究発表 第二部

---

### 1. 「Voltaire の英語における関係代名詞の用法について」

神戸市外国語大学非常勤講師 今井康貴

18 世紀に活躍したフランス人啓蒙思想家 Voltaire は、イギリスへの関心が高く、1726 年から 1729 年には実際にイギリスに滞在していた。彼は英語に対しても大きな興味を示しており (Cronk (2017))、彼自身によって英語で書かれたとされている書簡や著作が現代に残っている。本発表では、Voltaire が英語で書いた 105 通の書簡を調査した Imai (2019) の結果と比較しながら、Voltaire が自ら英語で執筆したと考えられている *An Essay upon the Civil Wars of France* (1727) と、彼の著作を John Lockman が英語に翻訳して出版されたと考えられている *Letters concerning the English Nation* (1733) での関係代名詞の用法を分析する。

18 世紀の英語は規範文法家の影響について論じられることが多く、関係代名詞についても、*The Spectator* の創設者である Addison、Steele を始め、多くの文法家はその用法について議論をしている。本発表では、そのような時代における Voltaire の非母語話者としての英語の用法を探る。

### 2. 「現在時制と小説—過去時制語りから現在時制語りへ—」

広島大学助教 重松恵梨

伝統的な小説では、「経験すると同時に語ることはできない」という認識から、語りには過去時制が使用され、現在時制は「過去時制語り (past-tense narration)」の枠組みの中で使用されてきた (語り手のコメント、歴史的現在、直接話法など)。しかし、1960 年代以降、現在時制で語られる小説が増加し、「現在時制語り (present-tense narration)」は、今では語りスタイルとして確立されつつある。

現在時制語りは、特に物語論において、歴史的変遷を踏まえて論じられてきたが (cf. Fludernik (2003)、Huber (2016))、その文体研究は未だ萌芽的段階にあると言える。本研究では、小説勃興期の 18 世紀から現代の小説を扱い、小説における現在時制の用法がどのように変化しているかを歴史的視点から考察し、語りにおける現在時制の使用 (とりわけ語りの時制としての現在時制) の文体的効果を分析する。

### 3. 「19 世紀における動詞 *allege* の助動詞化」

青山学院大学教授 中澤和夫

本発表の対象とするのは、19 世紀以降のアメリカ英語である。動詞 *allege* はつとに奇妙な

振舞いをする事が知られている。まず *allege* は、単純名詞か節を取る。

- (1) a. The complaint alleges serious ill-treatment on the part of the grantees.
- b. She wrote to Frederick...alleging that she needed these funds to bring to a close the Diet.

また、現代英語では、動詞 *allege* は、(2a) のように、その補部として不定詞付き対格を取らないとされている。しかし、奇妙なことに、(2b, c) のように、対格名詞句が移動すると、文法的となる。

- (2) a. \*I alleged John to be a fool.
- b. John, I alleged to be a fool.
- c. John is alleged to be a fool.

本発表の目的は、動詞 *allege* が現れる上記諸構文および他の幾つかの構文を検討し、最後に (2b, c) とは異なる [*allege* + to VP] が存在し、この *allege* to 語連結が助動詞化している事実 (3) を指摘する。なお、この構文は *OED Online* にも未記載である。

- (3) These pictures inside a local hospital allege to show children who've been injured in airborne chemical attacks. (COCA)

(web 開催のため、シンポジウム及び講演は次回大会まで延期となりました。)